



研究代表者 高橋 康介（中京大学心理学部・准教授）



タブレット装置を用いたフィールド実験の風景。左から現地アシスタント、高橋、実験参加者、現地アシスタント。実験参加者自身がタブレットを操作し、実験を進めている。なお、この実験場面は比較的实验室場面に近い理想的な状況で実施できたものであり、他の実験場面では周囲に人だかりができるなど、状況は様々であったことを記しておく。2017年8月、タンザニア・タンガニーカ湖畔の村にて。撮影：島田将喜（帝京科学大学・連携研究者）。

○研究の背景と目的

文化や地域が異なれば環境は異なる。質感認知が「ものと環境と観察者の相互作用が生み出す（西田）」ならば、文化や地域は質感認知の規定因となり得る。質感の情報及びその認知過程は生まれ育つ環境によらず人類共通であるのか、それとも視覚環境が我々の質感認知を育むものなのか。この問題を考える上では、欧米や日本など都市部だけでなく世界中の様々な地域にアプローチして実証的なデータを取得する必要がある。

本研究計画では文化人類学者や霊長類学者とのコラボレーションにより、フィールド実験という手法を通して質感認知特性を多地域間で比較し、その通文化性及び文化依存性を検証するとともに、各地域での視覚環境を収集・解析して認知特性との関係を調べる。このアプローチを通して、生まれ育った地域や文化の視覚環境が質感認知にどの程度、どのように寄与しているのか検討することを目的としている。

○これまでに得られた成果

1) 環境映像からの地域推定 2016年度～2017年

度にかけて、連携研究者の協力の下、カメルーン、カナダ（都市部、郊外）、インドネシア、フィンランド、ラオス（都市部、山間部）など様々な地域へアクセスし、各地域の環境映像の取得を行った。これらの各地域の映像を用いて日本人被験者にて地域推定実験を実施した。映像から切り出した環境画像に対してガウシアンフィルタをかけて、オリジナルカラー画像、グレースケール画像として呈示し、実験参加者はその画像の地域が世界のどこなのかを地図上で回答するという実験である。多くの地域において正答に近い地域が選ばれる傾向があり、「地域の特色」ともいべき画像特徴が存在することが示唆された他、欧米都市部（カナダ・フィンランド）においては色情報を脱落させることで混同が起こった。

2) 質感フィールド実験 2017年の7月～8月にかけて、東アフリカ・タンザニアのマハレ近郊の村に滞在し、持ち運び可能な実験環境としてタブレット装置を用いて、公募研究当初より予定していた質感に関するフィールド実験を実施した。なお、タブレットベースの実験構築、比較用に大規模サンプルは計画班とのコレボレーションによる。実験では、複数の刺激画像の中から「仲間はずれ」を探すというユニバーサル質感課題を実施した。質感カテゴリとして、「光沢の強度」「光沢の鋭さ」「不透明 vs. 半透明感」「銀 vs. ガラス」「金 vs 黄プラスチック」の5種類を使用した。大規模サンプルとの比較など詳細な解析を実施中であるが、「透明感」の認識において大規模サンプルとの間に顕著な違いが現れる可能性が示されている。この点に着目し、実験時に取得した一人称視点映像を用いて半透明な物体の存在についての事前確率の計算を進める。

3) 絵画印象フィールド実験 領域会議の議論から生まれた計画班 B01-4 との連携研究である絵画色彩印象研究について、上記の滞在中にフィールド実験研究を行った。原画の色彩が好まれるという傾向がフィールド実験でも確認された。現在、日本国内で取得するデータとの比較を進めている。

○関連する研究発表

学会発表など

1. 鎌水秀和・銭琨・大石高典・島田将喜・高橋康介 自然風景画像からの地域推定における色情報の効果。日本心理学会第81回大会，長崎，2017/9/20-22